HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<特集>人新世の北方漁業史 : 変わり続ける環境と社会に生きる北方民族
Author(s)	近藤, 祉秋
Citation	北海道立北方民族博物館研究紀要, 28, 1-6
Issue Date	2019
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73930
Type	article
File Information	Histories of Northern Fishing in the Anthropocene.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道立北方民族博物館研究紀要 第28号
Bulletin of the Hokkaido Museum of Northern Peoples 28:1-6(2019)

＜特集＞

人新世の北方漁業史：変わり続ける環境と社会に生きる北方民族

近　藤　祉　秋*

＜Special Issue＞

Histories of Northern Fishing in the Anthropocene: Northern Peoples in Ever-changing Environment and Society

Shiaki Kondo*

This Special Issue is devoted to describing histories of northern fishing in the Anthropocene. Northern indigenous communities face new challenges as well as new opportunities as global warming progresses. Historical perspectives are necessary if we hope to understand Arctic and northern people's adaptations to global biocultural change in the Anthropocene.

1. はじめに

近年、「人新世」（人類世）という言葉がよく聞かれるようになった。これは、約1万年前に始まった「完新世」はすでに終わりを迎えたという認識のもとに提唱されている言葉であり、イギリスで産業革命が始まった18世紀から現代までの地質時代を指している（人新世の開始時期には諸説あり）。その名前が示す通り、「人新世」は、地球環境を大きく変える力を有した地質学的なアクターとして人類を再定義する見解である（Crutzen and Stoermer 2000）。

人新世をめぐる議論は、北極域研究においても他人事ではない。産業革命以降の人類活動に起因する地球温暖化は、全球規模で生じている現象であるが、北極域ではとくにその影響が大きいと言われてきた。北極海を覆う海氷が記録的な減少を見せており、陸域では、永久凍土の溶解が着実に進んでいる。気候変動によって、全球規模の水循環が変化しつつあり、さまざまな要因が重なり合う中で複雑な環境変化が進みつつある（檜山 2015）。

本特集は、北極域研究共同推進拠点・共同推進研究プロジェクト「北極域における人新世の生業システム」[1)]（以下、本プロジェクト）の中間成果として企画されたものである。本プロジェクトでは、北極域に居住する諸民族が「人新世」的な変化をローカルなレベル

* 北海道大学アイヌ・先住民研究センター　助教（Hokkaido University）

キーワード　商業漁業、気候変動、資源開発、適応
Key Words　Commercial fishing, Climate change, Resource development, Adaptation

でどのように理解し、生業活動を通していかにみずからの生活を（再）構築しているかという問いを、歴史的な変化や北極域外との関係を視野に入れながら考察することが目指された。

2. 気候変動の民族誌

気候変動による自然環境の変化は、狩猟、漁撈、牧畜などを営む北方諸民族の生活にも影響を与えていることが長らく指摘されてきた。例えば、アラスカ北部のイヌピアットは捕鯨を伝統的な生業としてきた。だが、北極海の海氷原が少なくなったり、溶けやすくなったりすることで捕鯨に関わる作業の一環として海氷原を利用することのリスクが高まっている（岸上 2014:170）。

北極域で進行する大規模な変化を追う上では、気候変動は重要な要素であるが、あくまでもひとつの要素として捉えるべきである。例えば、シベリア東部のサハ共和国では、近年、解氷期に生じるアイスジャム洪水が「災害」化しているが、気候変動の影響のみならず、堤防＝道路の建設によって水の逃げ場がなくなったせいで、村内に水が滞留する結果を生んだと言われている。また、堤防ができてからも、ソ連時代には川の浚渫（土砂の除去作業）が定期的におこなわれていたので、洪水にはならなかったという。アイスジャム洪水が「災害」になった背景には、環境変化のみならず、土木工事をめぐる社会や政治体制の変化も大きく作用したと考えられる（高倉 2015:201-203）。つまり、単純に気候変動の影響だけを考えるのではなく、社会、経済、政治といったさまざまな領域の変化の一部として全球規模の変化を捉えなければ、人新世を理解したことにはならない。そして、より広い文脈で北極域の地域コミュニティの「適応」を考える際には、ソ連（ロシア）、アメリカ合衆国といった国家への組み入れ（集団化／植民地化）がもたらした影響を考慮に入れる必要がある。

また、気候変動は必ずしも負の影響を北極域にもたらすばかりではない。グリーンランドの自治政府は、温暖化によって石油・天然ガスなどの地下資源開発が可能となることを期待しているとされる。もちろん、地下資源開発は環境汚染のような負の影響をもたらす可能性も大いにあるが、そこから得られる収入は宗主国であるデンマークからの独立を進めるための資金源ともなり得る（林 2014:153）。人新世の未来は、北極海の海氷がほぼ消失した世界となる可能性があるが、それを危機と捉える人もいれば、好機と理解する人もいる。何よりも重要なのは、現在進行している全球規模の変化と将来への展望に関して、北極域の地域住民（とりわけ先住民族）の多様な声に真摯に耳を傾けることである。

3. 北方漁業史という視点

上に述べたような視点を踏まえながら、本プロジェクトでは現地調査と討議を進めていったが、多くの参加者が共通して報告した話題は北極域の漁業・漁撈に関するものであっ

た。海洋資源管理にまつわる文化人類学的な研究については、すでに『海洋資源の流通と管理の人類学』（岸上 2008）がある。この論文集は、北極域に議論を限定するものではないが、全体のまとめをする序章と終章を除く全10章のうち、5章分が北方地域の海洋生物資源（サケ、アザラシ）に関する議論を扱っている。これまでの文化人類学的な議論においては、地域コミュニティ内における海洋資源の分配に関する研究は多くあるが、「流通」に焦点を当てて、商業漁業と生存漁業の両者によって複雑に織りなされる水産物の生産、加工、流通、消費をめぐるネットワークを論じようとするものはなかった。その点でこの論文集は画期的なものであったと考えられる。

本プロジェクトでは、先行研究と同じく、北極域の生存漁業とあわせて商業漁業を検討の対象とする。この論文集が出版されて10年を経た現在、海洋資源管理をめぐる状況は一層混沌さを増しているように見えるし、この10年間の間に気候変動が北極域の漁業をめぐる新しいトピックとして盛んに論じられるようになってきた。

気候変動による漁業への影響については、すでにさまざまな現状報告や予測研究の蓄積がある。地球温暖化は、大方の場合、ある生物にとって最適な生息環境が現在の生息地とは異なる場所になることを意味する。つまり、地球上の生物が最適な生息地を求めて移動する生物多様性の再分布が生じることになる。アイスランドでは、北上するサバの漁獲量が近年劇的に増えたが、割当量をめぐって近隣諸国との間で緊張関係が生まれた。漁業対象種の移動が漁業者間の軋轢を招いた有名な例である（Pecl et al. 2017：3-4）。

予測研究では、一般的には高緯度地域の漁業者は魚類の北上（生息地の高緯度化）にともなって、気候変動によって利益を被る「勝ち組」になると言われている。だが、ある研究では、2050年代のグリーンランドにおいて、価格の低い魚種が増えて、かわりに価格の高い魚種が減ることが想定されるため、必ずしも増加分がそのまま利益につながるとは限らない点が指摘されている（Lam, Cheung, Reygondeau and Sumaila 2016：4）。また、北極海の海氷が減少すれば、非北極域の国が北極海での漁業により多く参入するかもしれず、より機械化・大規模化が進んでいる非北極域の漁業者に北極域の小規模漁業者が圧倒される可能性もある（Lam, Cheung and Sumaila 2016：348）。

先住民漁業への影響に特化した研究も発表されている。カナダ・ブリティッシュコロンビア州の沿岸では、2050年までにニシンとサケの漁獲量減少が予想されている。かわりにイワシのような他種の漁獲量は増えると考えられる。全般的に言えば、州内南部（中緯度）では気候変動の影響が大きく、州内北部（中～高緯度）では相対的に気候変動の影響が少ないと予想されるという（Weatherdon et al. 2016：8）。北西海岸先住民社会にとって、サケおよびニシンは伝統的な生存漁業でも商業漁業においても重要な種である（立川 2009）。ここに紹介した予測研究は、あくまでも温暖化の進行状況を仮定し、さまざまな変数を設定した上でモデルを介して計算したものである。必ずしもこのようになることが確実というわけではない点には留意する必要がある。

本研究プロジェクトでは、気候変動を騒がしい舞台上の（あくまでも）ひとつのアクターとして捉え、近年生じる全球規模の変化をこれまでの歴史上の一頁として見る立場をとる。気候変動がその地域の将来においてどれくらい重要な役割を演じるかはその地域ごとによるし、その影響に対する人々の対応はあくまでもこれまでの歴史的に構築された文脈の上でおこなわれることに着目したい。本特集が「人新世の北方漁業史」と銘打たれているのは、人新世を正しく位置づける上でも北方の漁業を理解する上でも歴史的な変化の視座が欠かせないという理解に基づいている。

グリーンランド北西部では、すでに漁業をめぐる大きな変化が進んできているという報告がある。的場澄人（本プロジェクト参加者）と山崎哲秀によれば、グリーンランド北西部のカナック村では、アザラシ猟からカラスガレイ漁への生業転換が進んでいるという。近年、毛皮利用の反対運動やソリ犬の減少から、アザラシ猟による現金収入が減少傾向にあったが、水産会社が2013年からカラスガレイを大量に買い取るようになった。その結果、これまで犬の餌を確保するためにおこなわれていた冬季の漁撈の重要性が大幅に増した。放棄される予定であった集落が漁撈拠点として適していることから、自治政府による投資で存続することも決まった。だが、2016年12月に生じた強風の影響により、これまで冬季には見られなかった海氷の大規模な流出があり、漁業のための小屋や漁具が流される被害が生じた（的場・山崎 2018）。環境変化は、新しい現金収入源をもたらした一方で、新しい懸念も生んでいる。カラスガレイ、アマエビ、ズワイガニといったグリーンランド産の水産物は、1990年代以来、継続的に日本にも輸入されており（ロイヤルグリーンランドジャパン /ウェブサイト2018）、北極域で生じている状況は日本の食事情にも影響をおよぼしかねない。

4. 本特集について

本特集では、北極域の漁業・漁撈に関する2本の論考が掲載されている。

近藤祉秋は、内陸アラスカ先住民のディチナニク人社会におけるサケ漁撈の歴史を描写する。内陸アラスカでは、非先住民との接触にともない、漁撈の技術が大きく変化してきた。その歴史の中には、マスノスケの生存漁撈で使われてきたヤナの使用禁止という州政府による圧力も含まれている。2010年代には、マスノスケの記録的な不漁が社会問題となっているが、人々はビーバーダムの増加と乾燥化によってサケの遡上が妨げられていることがマスノスケ減少の一因ではないかと考えている。近藤は、サケ遡上地における人々の活動を報告し、人々の語りが気候変動と社会変化の両者が絡まり合って生じている現象を的確に表現している可能性を示唆している。

大石侑香は、西シベリア森林地帯のハンティ社会における内水面漁撈の移り変わりを論じる。帝政ロシア時代から西シベリアの淡水産資源の価値は見出され、彼らの漁撈は外部とのかかわりにより展開してきた。帝政時代にはハンティはロシア商人と漁撈交易を行い、

ソ連時代には国営農場、現代ロシアでは農業企業において漁業に従事してきた。一見すると彼らの漁活動は漁道具の近代化以外はあまり変わらず一貫して行われてきたようにみえる。だが、ハンティは自然環境的変化・社会的変化に対処するために漁撈への依存度を柔軟に変えてきた。現在では、魚の減少や漁規制という事態の中で漁撈の継続が難しくなった側面もあるが、アウトドア観光ビジネスの立ち上げを含む新しい動きも生まれてきている。

本特集の論考はいずれも北極域の内陸部を扱うものであり、漁業をめぐる問題は沿岸地域のみにとどまらないことを改めて示している。遡上性の魚類は、海洋および陸域の両方の環境に依存するため、環境変化と社会変化の複雑な影響をことさら強く受けるものと考えられる。今後、水産学、漁業管理学、保全生態学、氷雪学といった自然科学分野との対話が更に必要とされることは間違いない。その際、先住民族（少数民族）を含む現地コミュニティと科学コミュニティの架け橋として、文化人類学は大きな役割を果たすことができる潜在性を有している（高倉 2018：243-244）。

18世紀から始まる人新世は、非北極域出身の人々によって北極域が植民地化された時代でもあった。「人新世」の誕生は、金、毛皮、海産物、石油など北極域の資源を大量に汲み出し、消費する世界システムの誕生とも無縁ではない。産業や大企業が悪者だと決めつけるつもりはない。大事なのは、北極域の人々、とりわけその地の先住民族が望む形で環境的にも経済的にも「持続可能な開発」がなされることである。どの地の先住民族コミュニティの中にも将来の展望に向けて多様な意見があるだろうから、簡単な結論が出るとは思われない。それでも、人新世を乗り越える術は、驚くほど多様な生を営んできた人類の知恵を総動員することによって初めて生まれるのではないだろうか。

注

1）本プロジェクトは2017年度～ 2018年度にわたって実施されたが、その前身として同拠点の「北極域の人類社会における生業活動と大規模な変化への適応」（研究代表者：近藤祉秋）（2016年10月～ 2017年3月）があった。

参考文献

Crutzen, Paul J. and Eugene F. Stoermer
2000 The “Anthropocene”. *Global Change Newsletter* 41:17-18

Lam, V. W. Y., W. W. L. Cheung, G. Reygondeau and U. R. Sumaila
2016 Projected Change in Global Fisheries Revenues under Climate Change. *Scientific Reports* 6:32607

Lam, V. W. Y., W. W. L. Cheung and U. R. Sumaila
2016 Marine Capture Fisheries in the Arctic : Winners or Losers under Climate Change and

Ocean Acidification. *Fish and Fisheries* 17: 335-357

Pecl, G. T.他40名

2017　Biodiversity Redistribution under Climate Change: Impacts on Ecosystems and Human Well-being. *Science* 355: eaai 9214

Weatherdon, L. V., Y. Ota, M. C. Jones, D. A. Close, and W. W. L. Cheung.

2016　Projected Scenarios for Coastal First Nations' Fisheries Catch Potential under Climate Change: Management Challenges and Opportunities. *PLoS ONE* 11(1): e0145285

岸上伸啓

2014　『クジラとともに生きる：アラスカ先住民の現在』臨川書店：京都

岸上伸啓編

2008　『海洋資源の流通と管理の人類学』明石書店：東京

高倉浩樹

2015「恵みの洪水が災いの水にかわるとき」檜山哲哉、藤原潤子編『シベリア：温暖化する極北の水環境と社会』京都大学学術出版会：京都 pp. 173-222

2018「地球温暖化と人類社会」高倉浩樹編『総合人類学としてのヒト学』放送大学教育振興会：東京 pp.234-248

立川陽仁

2009『カナダ先住民と近代産業の民族誌：北西海岸におけるサケ漁業と先住民漁師による技術的適応』御茶の水書房：東京

林直孝

2014「羊をめぐる展望：グリーンランドの先住民性の構築」『文化人類学』79(2)：143-163

檜山哲哉

2015「気候・凍土と水環境」檜山哲哉、藤原潤子編『シベリア：温暖化する極北の水環境と社会』京都大学学術出版会：京都 pp. 3-29

的場澄人，山崎哲秀

2018「2016年12月にグリーンランド北西部カナック村で生じた海氷流出事故と漁業被害：グリーンランド北西部における社会・自然環境と生業の変化」『北海道の雪氷』37：51-54

ロイヤルグリーンランドジャパン

https://www.royalgreenland.co.jp/　（2018年11月26日閲覧）